

# 熊谷空襲

明戸まさ

昭和二十年八月十五日、私は埼玉県熊谷市におりました。その日の午前二時ごろ、突然、空襲警報のサイレンが鳴り出しました。

私は、その時、二里（約八キロ）ほど離れた田舎へ行っていて、外に飛び出してみると、熊谷市の上空のあちこちで火の手が上がっていました。

そのうちに「熊谷に焼夷（しょうい）弾が落とされた」と叫ぶ人たちがやって来ました。私は、取る物も取り敢えず、二里の道を歩き出しました。人々は、ちよつとした荷物を持って逃げて来ます。私は、逆に火

の中に向かって行きます。

ちよつと村外れに来た時、父に会いました。父は、警防団員で自宅にはいなかったのです。私の顔を見ると、へなへなと座り込み「皆、焼け死んだ」と言った切り、放心状態になつてしまいました。

私は、それでもまだ自分の家だけは残っていると思い、自分の目で確かめたく、父が止めるのも聞かず、火のない所を探し、自宅まで行つてみました。

やはり、家はなく、母をはじめ弟妹七人全員が亡くなっていました。すぐ下の妹は、玄関の前で焼夷弾の

直撃を受け、くすぶっていました。火を消したくても水がなく、自然に消えるのを待つばかりでした。火が消えた後、ちよつと触つても皮がするりとむけ、何とも言えない地獄の光景でした。

近所の人たちも川に飛び込んだ人は、皆亡くなっていました。

カンカンと照りつける真夏の太陽、それに燃え続ける火の中で、やつと出来た五つの棺桶に七人の遺体を入れ、田舎から持つてきてもらった荷車に乗せ、一里半（約六キロ）の墓地まで運びました。

忘れようとしても忘れられない八月十五日が毎年やってきます。